

百日咳—県内の発生状況を中心に



県感染症情報センター

きき 感染症を 声 知る

◆59◆

百日咳(ひやくにちせ)は、「発病すると約百日かかる」ところから名付けられたといわれる、古くからある感染症です。平成30年1月から、全ての患者の発生状況を医師から報告いただく全数把握疾患となり、詳細な患者情報が把握できるようになりました。今回はこの百日咳の説明と、平成30年の県内の発生状況についてお話しします。

百日咳の症状は、小児と成人とでは大きく異なります。小児ではかぜのような症状から始まり、徐々に咳がひどくなり、特徴的な発作性けいれん性の咳となっていくきます。特徴

的な咳とは、短い咳が連続的に起こり(コンコンコン...)、続いて吐き切った息を吸うとき、笛のような音(ヒュー)がする、とても息苦しい咳です。乳児ではこの特徴的な咳が見られないうちに無呼吸発作を起し、そのまま呼吸停止して死に至ることもあります。

予防に関しては、四種混合ワクチン(百日咳・ジフテリア・破傷風・ポリオ)が定期接種となっています。定期接種とは、定められた期間(年齢)に接種すれば、公費助成

があり、無料または低負担で接種できる制度です。この四種混合ワクチンは、不活化ワクチンなので、4回接種する必要があります。ただし、接種

できるのは生後3カ月からで、それまでの乳児はワクチン接種ができません。ワクチン接種を受けられない乳児が、特に重症化してしまうため、乳児には百日咳を近づけな

後5歳までは少ないのですが、5~9歳では多くなり、特に6歳が最も多い状況でした。15歳以上では、50歳代までの全年代で患者報告があり、60歳以上はありませんでした。

百日咳を含む4種混合ワクチンは、生後3カ月~18カ月の間に4回接種します。接種してすぐの年代は、ワクチンの効果により患者発生は少なく、その後徐々に免疫力が低下するの、5~9歳の患者が多くなり、特に小学校に入学する6歳の患者が多いことがわかりました。

乳児への感染に注意 咳が続いたら受診を

いようにする必要があります。

▽奈良県内の発生状況

①年齢別
県内での百日咳の発生は、平成30年の1年間で56例の報告がありました。5月が最も多く、5月以降も少しずつ報告が続きました。年齢別では、特に重症化する生後6カ月までが8例あり、その

生後6カ月までの8例について、誰から感染しているかについては、推定も含めて、家族内から5例(兄弟から4例、母親から2例、祖母等1例)、不明が3例でした。また、7例はワクチン接種歴がなく、入院しています。

また、ワクチンを接種していない乳児は、やはり重症化することから、接種できる年齢になったらワクチンを接種しましょう。

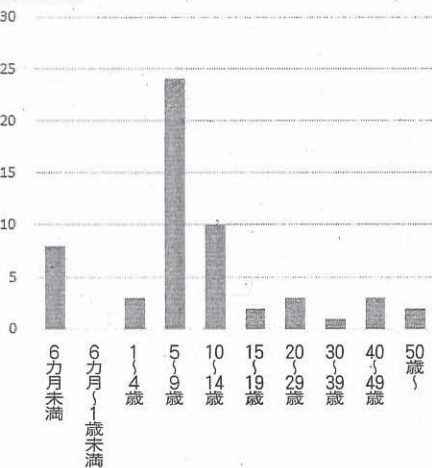
▽百日咳の症状

百日咳の治療と予防
百日咳の治療には、マクロライド系抗菌薬が有効です。服薬により感染力(他人にうつす力)も早く低下します。早めの受診と正しい服薬が重要

「また、ワクチン。毎月言うようなこと」と、思われている読者の方もいるでしょう。でも多分、来月もワクチンのお話をすると思います。今後ともよろしくお願

患者が多いこと、生後6

患者報告数



平成30年の奈良県の百日咳の発生状況

6カ月未満 6カ月~1歳未満 1~4歳 5~9歳 10~14歳 15~19歳 20~29歳 30~39歳 40~49歳 50歳~